

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	舟橋 健太
論文題目	現代インドの「改宗仏教徒」ーウツタル・プラデーシュ州における「不可触民」のアイデンティティの諸相ー		
(論文内容の要旨)			
本論文は、現代北インドにおける「改宗仏教徒」（仏教に改宗した「不可触民」）のアイデンティティの諸相を、彼らの暮らしや儀礼を通して分析したものである。なお、独立後、「不可触民」の多くはダリトと自称するようになっている。本論文に関わる主な調査は 2003 年から 2006 年までの間（22 ヶ月間）に行われた。 まず序論において問題の所在と目的が示されている。これまでの「不可触民」や「改宗仏教徒」の研究の検討を通して、彼らのアイデンティティを固定的に見るのではなく、さまざまな交渉によって新たなものになっていく過程を明らかにすることの意義が確認されている。本論文の調査地はウツタル・プラデーシュ州にあり、この地域の「不可触民」（本論文ではチャマール・カースト）の中にも「改宗仏教徒」と、改宗していない以前のままのヒンドゥー教徒とが混在して暮らしており、日常や儀礼などにおいてアイデンティティが問われる場面が現れる。本論文の目的は、このような状況での「改宗仏教徒」が、自らの出自と関わる「過去性」と親族・姻族関係などを通じた「関係性」を巡るさまざまな交渉を通して、いかに自らの位置取りや関係性を変えていくかを考察することにあるとしている。 前半の第 1 章から第 3 章までは、「不可触民」による仏教改宗に至る経緯と組織活動が概観されている。第 1 章では、「不可触民」という人々の呼称とカテゴリー形成史が概観され、さらに植民地期から独立前後に行われた「不可触民」解放運動の状況が示されている。第 2 章では、近現代の「不可触民」運動、すなわちダリト運動の指導者であった B.R.アンベードカルの生涯と思想、そして仏教への改宗を指導した際の新しい仏教解釈などが示されている。第 3 章では、アンベードカルが設立したインド仏教徒協会の活動を、1 人の指導者に着目して具体的に示している。 後半の第 4 章から第 7 章までは、村落部の調査に基づく事例研究を通して「改宗仏教徒」のアイデンティティが論じられている。第 4 章では、調査世帯の居住する村落の概略が示され、「改宗仏教徒」の社会経済的な状況、さらに仏教に関する語りが紹介されている。第 5 章では、入信儀礼や誕生儀礼などを通して仏教徒になることや仏教徒であることが、かつてインド人すべてが仏教徒であった過去へのつながり（「過去性」）を確信することとして分析されている。第 6 章では、この地域のヒンドゥー教徒の間で信仰され、平等主義者であり詩聖人とされるラヴィダース（中世北インド）について論じられている。ラヴィダースは、「改宗仏教徒」と同じチャマール・カーストであるが、ヒンドゥー神への不信心を強調する「改宗仏教徒」もラヴィダースに対しでは強い信仰心を示している。これを、仏教徒としてのアイデンティティを維持しな			

がら同じチャマール・カーストとしてのアイデンティティを維持する「過去性」の確信につながっていると分析している。第7章では、「改宗仏教徒」が、ヒンドゥー教徒にとどまっている親戚・姻戚などと婚姻儀礼や葬送儀礼などを行う際に、選択的参加や部分的参加、儀礼の改変などを行い、「関係性」を維持しつつ、異なるアイデンティティを両立させる交渉を行っている過程を論じている。

結論では、これまでの議論を要約した上で、1人の「改宗仏教徒」を取りあげながら、現代インドに生きる「改宗仏教徒」が過去と他者との交渉をしながら新しい未来を志向しうる可能性を示唆している。

(論文審査の結果の要旨)

現代インドにおいて、ダリト(「不可触民」)は被差別状況から脱するために、政治的な運動を通して力を獲得するか、改宗によってカースト・ヒンドゥー体系から逃れ新たなアイデンティティを獲得するという主に2つの道を模索してきた。両者はしばしば関係しながら進行するが、後者のやり方においては、アンベードカルが指導した仏教改宗運動が有名である。この仏教改宗運動の興味深い点は、指導者アンベードカルの編み出した仏教解釈にある。というのも、ヒンドゥー神への不信心や輪廻転生概念の否定によってカースト差別を支えてきた概念や実践を拒否し、平等主義的な仏教を編み出したからである。この運動によって数百万の「改宗仏教徒」がインドで生まれてきている。

ところで、これまでの「改宗仏教徒」の研究は、改宗を過去の差別状況からの断絶としてとらえる視点が強く、現実の改宗のなかで立ち現れる既存の社会文化経済的条件との連続性や接続性に十分配慮してこなかった。つまり、現実の改宗を通して何がどのように変わったのかに関しては具体的な文脈での研究がきわめて少なかった。

本論文は、上記のような「改宗仏教徒」研究の不十分な点を克服することを目的としている。ただし、本論文は、ウッタル・プラデーシュ州におけるチャマール・カーストのダリトが「改宗仏教徒」になる過程を主な研究対象としており、チャマール・カーストの「改宗仏教徒」と同じカーストのヒンドゥー教徒間の交渉を巡るアイデンティティに焦点を絞って論じている。その意味では、チャマール・カーストを超えたより広い社会における様々な交渉は視野の外に置かれている。しかしそのような限界があるものの、上記のように焦点を絞ったことによって同じカースト内での「改宗仏教徒」とヒンドゥー教徒の相互作用をはっきりと浮かび上がらせ、改宗を巡る連続性や接続性を論じることが出来ている。

本論文の意義は以下の2点にある。

第1に、北インドのウッタル・プラデーシュ州におけるダリト研究への貢献である。インドにおけるダリト研究の集積は、アンベードカルの活動した西インドや反ブラーマン運動が盛んな南インドに偏っており、北インドでの研究はカースト政治との関連以外ではあまりなされてこなかった。本論文は研究の空白を埋め、ウッタル・プラデーシュ州におけるダリトの生活世界の実情を明らかにした。とくに、チャマール・カーストの聖人ラヴィダースへの信仰が、ヒンドゥー教徒のみならず「改宗仏教徒」にも共有され続けている点を明らかにし、改宗における連続性の具体的な事例を明らかにした。

第2には、「改宗仏教徒」を巡るアイデンティティの諸相を明らかにするために「過去性」と「関係性」という2つの分析枠組を提示した点である。筆者はこの枠組で、ブッダと聖人ラヴィダースにつながる「過去性」(連続性)と、親戚・姻戚と選択的につながる「関係性」(接続性)をもとに、「改宗仏教徒」が平等主義的な立場を堅持し

つつ宗教を超ええた社会関係を維持することを可能にしていると分析してみせた。なお、この枠組は、単にダリト研究のみならず、インドを超えた被差別状況に関する、新たなアイデンティティ生成とそれと連動する社会関係の変化を考える上で重要な 1 つの参照点になると思われる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 22 年 6 月 15 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。